

こんな時だからこそ、自らの目で確かめよう！ “人との交流”で見えたもの



2012年訪中団リポート
by 日中経済交流研究会 豊岡 敬

日程 2012年11月14日から18日

訪問地 寧波市、蘇州市、上海市

参加者 17名



蘇州市、虎丘での記念写真▲

尖閣国有化後の反日デモの影響で、政治的に悪化する日中関係の中、緊張しながら、日中経済交流研究会の訪中団は、“人との交流”をテーマに、寧波市の若手経営者の企業訪問と夕食交流会を開催しました。



▲中国人経営者を囲んで歩いた際にも、

我々が日本人だと分かっても、道行く人たちは、友好的な笑顔で迎えてくれました。その印象は、地元企業の中国人経営者との意見交換においても変わることなく、日中はビジネスパートナーであるとの感を強めました。

夕食交流会では、2つの円卓に分かれての会食となり、私は樋爪会長と同じ円卓でした。樋爪会長のタカラ産業(株)は蘇州に進出されて20年以上になるのですが、「うちの社員は、タバコを吸いながら仕事をする。機械を動かす。注意したら、その場に吸殻を捨てる」と中国社員教育の難さを嘆いておられました。すると、即座に中国の経営者からも「それは私たちも全く同じです」と発言があり、日中間に違いはないものだと納得しました。また、ここ数年の中国の人件費が、東南アジ

ア諸国よりも高騰し、採算が合わなくなり、中国から逃避する企業も増えていることも懸念されていました。そんな中で、中国の経営者は、「我々の願いは、会社が儲かり、社員の生活が豊かになることです」と言われました。これは、同友会の労使見解に近い考え方でした。

日本にいてメディアを通して見る中国は、日本とは随分と違う国で、お互いが相容れない感じに映りますが、経営者同士が胸襟を開いて話をすると、その価値観にあまり大きな違いはないように感じました。

昼間、夕食懇談会に参加された経営者たちの鍛造、鋳造、金型、プラスチック製品等の工場を見学したのですが、製造されている製品の多くが、日本向けでした。すでにビジネスにおいては、日中はお互いに依存する関係になっています。たとえ、国家同士が反目しても、民間同士は、その関係を維持していかなければなりません。両国の関係が悪化したこの時期に、あえて訪中団を出した意義は大いにあると確信しました。

今後ともに、我々は定期的に訪中団を出して、中小企業同士で相互理解を深めていくべきだと思い懇談会を終えました。



▲円卓を囲んで議論白熱